

後記

大山耕輔先生は、二〇一三年三月末日をもって、慶應義塾大学法学部を定年退職される。一九九九年四月に筑波大学から助教として着任されて以来、二四年間の長きに亘って本塾で教鞭を執られてきたことになる。法学部では、長く人事委員会委員長の職をお務めになり、学部の教職員からもその公正・公平なお人柄に信頼を寄せられてきた。また、塾外では、日本行政学会の理事長や日本学術会議会員を歴任されるなど、文字通り本塾を代表する行政学者としてご活躍なされた。本退職記念号は、そうした大山先生を慕う本塾・学界の同僚や、大山先生のご学恩を受けて育った研究者たちが寄稿した論文を所収したものである。行政学・地方自治・政治学などの多様な分野の論文の並びに、市民社会の側から行政学を眺めてきた大山先生の研究の足跡を見出すのは牽強附会だろうか。大山先生の本塾並びに学界への多大なる貢献を讃えて本記念号を上梓させていただきます。

私、河野が初めて大山先生とお会いしたのは、私が大学院生として入学した慶應の法学研究科の授業においてであった。学部の学生の時期にキャンパス内のどこかでお会いしていたのかもしれないが、特に記憶にはない。一学年上の先輩である大山先生の印象は、非常に几帳面で何事にも真摯な方というものであった。研究者としてはまず行政指導に関する優れた研究で知られることになり、以後順調に行政学者としての道を歩まれた。その後お互い慶應を離れ、別々の大学に奉職することになり、特に交流もなく暫く離れていたが、私が慶應に職を得てからは政治学科の政治理論部門の先輩として、様々なことを教えていただいた。常にその語り口は慎重で、よく考えられたご意見には、ハツとさせられるものがあり、非常に参考となった。感謝に堪えない。

大山先生に驚いたのは、七階にある研究室までエレベーターを使わず階段で上り下りをされていたことだ。そのような先生は他にもいたが、多くは若い人で、定年まで常に階段を利用されていたのは大山先生ぐらいだろう。私にはとてもできないことで、本当に健康に留意されていたのに違いない。

後進の指導にも尽力されたが、大学院生の報告に際して、

常に「行政学とは何か」を大学院生に問われていた姿からは、大山先生の行政学者としての矜持を感じたものである。慶應を退職後もお元気にてご活躍されることを心からお祈り申し上げます。

二〇二二年一月

法学部教授 河野 武司
法学部准教授 築山 宏樹